シリーズ多文化教育実践　第１回

多文化社会学部アフリカハウス

長崎大学　増田　　研

1　メンバーシップの緩い学部内非公式団体

多文化社会学部アフリカハウス（通称、ハウス）は、2015年４月に発足した学部内非公式団体である。しかし、実際のところは、「学部内」「非公式」「団体」のそれぞれにカギ括弧をつけてしまいたいくらいその位置づけは不安定である。ハウスの関係者には学部外や学外の人が幾人もおり、団体であるかどうか疑わしいほどメンバーシップが曖昧である。そもそも「公式」と「非公式」の境目を気にするのは私たちハウスではない。

一応のところハウスのメンバーシップは、⑴コアメンバーの手元にあるリストと、⑵メーリングリスト、⑶フェイスブックのグループ「AFRICAHOUSE NU-TABUNKA」への登録によって三重に把握されているが、この３つのリストは微妙にズレていて、どれひとつとして確実なメンバーリストはない。また、メーリングリストには他学部の学生や大学院生が登録されているほか、「AFRICA-HOUSE NU-TABUNKA」には社会人やNGO関係者などが含まれている。概ねだが、手元のリストで学生がおよそ35人、メーリングリストとフェイスブックでは40名ほどが関係しているが、アクティブなメンバーはずっと少ない。二年目の2016年度からはコアメンバーを定めて連絡調整役としたが、部長も置かず、部費の徴収もせず、ミーティングへの出席義務もない、出入り自由な自主企画イベントサークルのような集まりになっている。

こうした集まり方には不安定さがつきまとうが、もともと未登録（＝非公式）であるうえに、特段の社会責任を負っているわけでもないので、運営はとても気楽である。

アフリカハウスの名称には学部との結びつきを示すために「多文化社会学部」を冠しているが、ハウスが学部からのお墨付きをもらったことは一度もない。本稿の結部において「非公式」であることの積極的意義を主張するが、他方で公式のものではないがゆえのデメリットもある。大きなデメリットは公的な予算をアフリカハウスの名において獲得できない（そもそも枠組みがない）ことである。

そのためハウスには総会も、役職も、会計報告もない。

他方で、「非公式」ではあるものの、実施するイベントによっては「公式の何か」との関連があり、たとえば日本アフリカ学会九州支部の活動という位置づけを与えることによって、その活動をオーソライズすることができる。大学のお墨付きがないままの、まさに「イレギュラー」な活動であるが、内実はしっかり伴っている。

2　アフリカハウス前史

アフリカハウスには前史がある。それは2014年10月14日に文教キャンパスの長崎創楽堂で開催した「ポレポレツアー長崎」である。この時にはケニア在住の早川千晶さん、音楽家の大西匡哉さん、近藤ヒロミさんの３人による講演と演奏のツアーを長崎に招へいした。

この時には、長崎大学の文教および坂本キャンパスにいるアフリカ関係研究者や大学院生に声をかけて実行委員会を結成したのだが、同時にアフリカに関心をもつ多文化社会学部生（一期生）にもボランティアをお願いして開催準備を進めた。この際に開催準備や、あるいはオーディエンスとして参加してくれた学生たちが、のちにアフリカハウスの立ち上げに関わることになった。

3　アフリカハウス設立

アフリカハウス（当初はアフリカサークルと仮称していた）の設立を増田が思いついたのは2015年の２月頃である。もともとの着想は、2016年に開講される海外フィールドワーク実習（以下、海外 FW 実習）の実施準備に学生たちの意向を反映させたいという点にあった。ただし、この科目は2015年の時点では「未開講科目」であったから、教務委員会を通さずに直接学生たちに呼びかけた。

参加募集ポスターを多文化ラウンジに張り出したのは４月である。ポスターは「アフリカサークルに参加しませんか？　海外フィールドワーク実習などの企画メンバー募集中」と題したものである。

アフリカハウスの最初の会合は2015年４月16日で、20名ほどの学生が集まったと記憶している。ここで全体を「海外 FW 実習班」「アフリカ学会イベント企画班」

「ポレポレ班」の３つに分け、それぞれにリーダーを決めた。班のメンバーはフレキシブルで、複数の班にまたがる学生も多かった。海外FW班は夏休み前までに調査課題や事前調査についての検討事項をまとめた。

4　活動実績

アフリカハウスは2015年度、2016年度にそれぞれ５つのイベント企画を実現させた。

2015年度

(1)　ザンジバル実習の調査課題検討（2015年４月～７月）

(2)　菊池滋夫氏（明星大学）との懇談会（2015年６月18日）

(3)　Africa “PolePole” Week 2015 in Nagasaki, Exhibition and Liveの企画と運営

・ポレポレトーク＆ライブを10月８日に創楽堂において開催した。

・写真展「アフリカの子どもたち」を10月１日～14日に開催した。NPO法人アフリック・アフリカとの共催。

(4)　王維教員企画によるレクチャー＆ライブ「シルクロード音楽の旅：楽器を通して」の会場運営支援（2015年12月10日）

(5)　北九州ツアー

・JICA九州における研修プログラムへの参加（2016年２月19日）

・国際保健医療カフェ「国際保健の現実を知る・感じる～アフリカのフィールド事例から～」（2016年２月20日）　主催はアフリカハウスとカリブーニケニアの会、JICA九州の協賛、公益財団法人北九州国際交流協会および長崎大学グローバルヘルス・ネットワークの後援を得た。

上述の通り、アフリカハウスの初期の活動内容は３つであった。2015年４月か

ら夏までの期間はミーティング活動を中心とした。そのうち、海外FW実習のテーマ検討班の活動は7月には終了し、そこで作成されたテーマリストは同年8月の現地視察に生かされることになった。

アフリカ学会九州支部イベント（企画時点では「アフリカミニフェスタ」と仮称した）については、ポレポレトーク＆ライブ2015と合体させ10月のイベント「Africa “PolePole” Week 2015 in Nagasaki, Exhibition and Live」として結実した。

このイベントは10月8日の「ポレポレトーク＆ライブ」と、10月1日から14日にかけて大学附属図書館とグローバルヘルス総合研究棟（坂本キャンパス）で開催された写真展「アフリカの子どもたち」からなる大がかりなイベントであった。トーク＆ライブでは前年度に引き続き早川千晶さんと大西匡哉さんが登壇したほか、ケニア在住の永松真紀さんとその夫であるジャクソン・オレナレイヨ・セイヨ氏によるマサイ民族の暮らしに関するトークをメインのコンテンツとした。このイベントには学内外から100名ほどの聴衆を得ることができた。

写真展のほうはNPO法人アフリック・アフリカから写真パネルの提供を受け、本学部のアフリカ関係教員が提供した写真も合わせて41枚の写真（アフリカの子どもたちをテーマとしたもの）を、日本語と英語のキャプションを添えて展示した。また附属図書館では写真展に合わせて所蔵書籍によるアフリカブックフェアが開催された。

2015年度にはもう一つ、「北九州ツアー」と銘打ったイベントがあった（2016年2月19～20日）。北九州市にある国際協力機構（JICA）において正味半日の研修を実施し、同じく北九州を拠点として活動する中原由美子さん（カリブーニケニアの会）および、長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生でJICAや関連するNGOで働く人々の協力を得ることができた。20日の国際保健医療カフェ「国際保健の現実を知る・感じる～アフリカのフィールド事例から～」はアフリカハウスとNGOその他の外部団体との共同開催イベントであった。

2016年度

(1)　アフリカハウス・セミナー「川瀬慈作品上映会＆映像制作ワークショップ」　文教キャンパス総合研究棟3階にて一日かけて開催された。（2016年5月21日）

(2)「まるごと！マダガスカル」　長崎市立図書館新興善メモリアルホールに

て開催された。主催：長崎大学多文化社会学部アフリカハウス、日本アフリカ学会九州支部。共催：青年海外協力隊マダガスカル OV 会、カリブーニケニアの会、長崎大学グローバルヘルス・ネットワーク。ゲストは亀井岳（映画監督）、川瀬慈（民博・映像人類学）、深澤秀夫（東京外大 AA 研・文化人類学）、ZAFINDRASOA FUKAZAWA Françoise

(3) ポレポレ・トーク＆ライブ2016　（主催：多文化社会学部アフリカハウス、日本アフリカ学会九州支部）

・永遠瑠マリールイズ講演会「ルワンダの悲劇から学んだこと：命の尊さ、教育と平和の大切さ」（2016年10月12日）

・トーク＆ライブ「アフリカの教育と未来：ケニアとルワンダから」（2016年10月13日）　出演：早川千晶、永遠瑠マリールイズ、大西匡哉（ドラム演奏）

(4) 写真展＆ギャラリートーク「It's Zanzibar Style！」（2016年11月 1 ～14日）

2016年は春と秋に連続イベントを開催した。春のイベントは映画「ギター・マダガスカル」を長崎で上映することを核として、それに関連づけた一日イベントを企画した。この企画に関しては、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科の松井三明教員および大学院生の市野紗登美さんもハウスのメンバーとして中心的に関わってくださっただけでなく、青年海外協力隊の OV 会やカリブーニケニアの会といった外部団体の協力も得られた。また映画の宣伝のために長崎シティ FM の番組「ムービーズジャンクション」に増田と市野さんが出演したほか、長崎新聞にもイベントの告知を掲載していただいた。

イベント当日は近隣の多くの小学校で運動会が開催されたため、期待したほどの集客はなかったが、それでも映画上映とゲストトークには一般の観客が幾人も

来てくださった。トークショーでは国立民族学博物館の川瀬慈氏が司会を担当し、「ギター・マダガスカル」監督の亀井岳氏、マダガスカル研究者の深澤秀夫氏によるトークを展開した。

このイベントの前日には、川瀬氏による民族誌映像の上映会（午前）と、映像制作のワークショップ(午後)を開催した。これは比較的クローズドな会合であったが、坂本キャンパスからの参加者も得られた。多文化社会学部のカリキュラム（フィールドワーク・モジュール）との整合性という意味でも意義のある会合であった。

2016年度秋のイベントは、10月12～13日の講演会およびトークショー、11月の写真展＆ギャラリートークの２つの時期に集中して行った。12日の永遠瑠マリールイズさんの講演会には多文化社会学部を中心に60名ほどの人々が集まった。13日のトーク＆ライブにも同じくらいの参加者があったほか、演奏の舞台への飛び入り参加があったり、参加した高校生も一緒に踊ったりと、これまでになくノリのよいイベントとなった。

11月の写真展は「海外フィールドワーク実習」の予備的な成果発表として位置づけられたもので、パネル制作などの準備のために学部長裁量経費の支援を受けた。そうした意味においてこの写真展は公式化が可能なイベントであるが、あえてアフリカハウスの企画として開催したのには理由がある。ひとつの理由は教務・学務による制度的な「何か」を根拠とする介入を避けたかったことであるが、他方ではこれを単に海外FW 実習の受講者だけのものとしないことも意図していた。

なお、トークイベントについては、朝日新聞が永遠瑠マリールイズさんを取材し、2016年10月26日に「ルワンダと重ねた広島・長崎」と題する記事が西部版に掲載された。また、写真展については、長崎新聞が「アフリカで貴重な体験　ペ

ンキ画職人に弟子入りなど」（11月４日）、毎日新聞が「アフリカの島・ザンジバルで祭り風景など50点　長崎大で学生が展示」（11月10日）などの記事を掲載してくださった。

5　課題

このように書き連ねていくと、あたかもアフリカハウスは順風満帆に進んできたかのように見えるだろうが、実際はイベントを開催するたびに多くの課題に直面してきた。

まず、すでに書いたことであるが、時間的制約の大きさという課題がある。部室もないので、みんなが「たむろ」して日常的なコミュニケーションを交わす場所も確保できない。多文化社会学部の時間割は密であり、学年が上がることに学生メンバーが集まれる時間帯を見つけにくくなる。たとえば、ハウスの不定期ミーティングは概ね終業後の午後６時以降、もしくはランチタイムに実施されてきた。日中の時間帯には授業がひしめいているため、学生たちの共通の空き時間を見つけるのは困難、もしくは不可能である。

予算、時間の制約のほかに「非公式」であることのデメリットとして、教員やスタッフの関わり方の制約がある。上述のように、学部教員がかかわっている以上、正規の授業や公式活動とのバッティングは避けなければならない。また、非公式ではあるもの教育実践としての位置づけが可能である以上、ときには「公式」な筋にお伺いを立てながら活動を進めていく必要に迫られることもある。

また財政面においては、いずれのイベントにおいても赤字運営である。2016年度の秋のイベントについては、いずれもなんらかの予算を獲得できたものの、他の手持ちの予算からのやりくりや、カンパに頼らないかぎり実施できないのは相変わらずである。

実施された成果についてはすでに紹介したが、なかなか期待通りにいかないことも多い。たとえば集客の問題がある。会場が学内であろうが学外であろうが、映画上映会にしろ、展示会にしろ、集客には大きな問題がある。大学の人々を「想定される参加者」とすれば、文教キャンパスで実施することが便利であるが、そうすると学外からの多くの参加は望めない。「まるごと！　マダガスカル」のように学外の会場で実施すると、長大生の足は遠のく。学生たちの「外向きの態度」を上手に誘発することは大きな課題である。この点はしかし、他のイベントへの参加状況などをみても、アフリカハウスだけの問題だけではない。

教員の立場からすると、アフリカハウスの活動がなかなか学生主導にならない

ことにもどかしさを感じる。これまで実施されてきたイベントはいずれも増田が提案するか、外部から持ち込まれた企画であるか、いずれかである。もっとも、ひとたび企画が走り出せば、実施は学生たちが持ち寄る数多くの提案によって実現されるわけで、その意味ではやはり、ハウスの活動は学生なしでは成立しない。

最後に提起する課題は「継続性」である。学年による関心度合いの差もあり、この２年あまりで成し遂げたのと同じだけのことを、同じ熱意でもって永続的に続けられる保証はない。

このあたりのことはしかし、学生たち次第である。このままのスタイルで続けるのもよし、学生の反応がなくなった時点で自然消滅するもよし、あるいは活動の幅を広げてNPO法人にしてしまうのもよし。いずれのオプションを選択するにしても、それは学生次第である。